P08. 三重県鈴鹿市方言における用言のアクセント

竹内はるか（国學院大学大学院）

本発表の目的は、複雑な様相を示す三重県鈴鹿市の用慣のアクセントの実態を示し、名詞のアクセントと合わせて変化の様相を考察することである。

当該地域のアクセント体系は、伝統的には京阪式アクセントの地域である。しかし東京式アクセントが地域的におかわれている。この地域でも京阪式アクセントが地域的におかわれている。したがって、三重県鈴鹿市は伝統的には京阪式アクセントの地域であるが、地理的な要因もあり現在は複雑な様相が観察される。

昨年度の音声学では、当該地域の名詞アクセントについて、伝統的に保つタイプ、東京式アクセントの体系に変化したタイプ、変化の過程とみられるタイプの3タイプにわけ実態を報告した。今回は用言についての結果を報告する。

用言についても、名詞アクセント同様、伝統的なアクセント体系を保っている話者と、東京式アクセント体系に変化しつつある話者が観察された。したがって、名詞に比べ用言は、伝統的なアクセントを保持する傾向にある。名詞の調査結果では東京アクセントの体系になっている話者であっても、用言に関しては伝統的なアクセントが保たれている場合があった。特に伝統的に高起平板型のものは低起のもとのとは異なるという意識があるために伝統的な型を比較的保つ傾向がある。

伝統的に低起平板型のものは、共通語と伝統的な型とで個人内で違うやすいという結果が観察された。

また、東京式アクセントと京阪式アクセントを併用する話者も多く、その場合は場合によって言い分けている。という意識はあまりないようである。

調査方法は、単語を示し、話者自身にその単語を使い文章を作成して発音してもらうという対応の対面で行った。話者は10名から80名の26名。調査言葉は2〜4拍の動詞と形容詞、250語である。動詞は終形、過去形、否定形、命令形、形容詞は、終形、連体形、過去形の調査を行った。

P09. 幼児の音声における「機嫌」の音響的特徴

坂井康子（甲南女子大学）

千葉成美（キャテック株）

乳幼児の音声は非常に多様であり、その感情性に関する調べを、あるとは音響的な研究は数少ない。そこで坂井は、聴覚の差が大きく異なる音声の比較をおこなうことで幼児音声の感情性の調査の特徴を明らかにする研究をおこなった。その方法として、まず音声聴取の経験者2名が5児（24〜36か月齢）の「おかあさん」と発音している音声188例から聴覚印象として機嫌の良い音と聞き取るされる音声20例と機嫌の悪いと音声20例を選出し、これに対して成人1名を各々にそれぞれ「とても機嫌が良い」、「とても機嫌が悪い」までの6段階評価を求めた。なお、音声の選出時点で明らかに歌っていると聞き取る音声が観察されたことから、「歌っているように聞こえる」音声にチェックを入れることを併せて依頼した。この結果、機嫌が良い音声に「歌っている」という評価の高い音声が含まれており、この2音声は突出して音声長が長いなどの特徴を有した。そこで、この2例の音声を除外して機嫌の良い音声と悪い音声を比較した結果、機嫌が悪い音声の音声長が有意に長く、機嫌の悪い音声の末尾に下降傾向が見られた。これを引き続き我々は、同資料の評価点数上位10位（「機嫌が良い音声」）と下位10位（「機嫌が悪い音声」）の音響分析をおこなった。その結果、機嫌の良い音声は機嫌の良い音声と比較して、一定の周波数帯でスペクトル変化が著しく、②高い周波数成分が比較的多く含まれていること、③周波数成分が重層的に現れ、連続的に変化する可能性が見られた。

P10. アクセント史料から見た下降式

笠間裕一郎（東京外国語大学大学院）

院改期日本語京都方言のアクセント史料から、語聲調の一つ、下降式を持つと考えるべき語の存在に就て論ずる。

この方言の「動詞連体形」は、一般に高いピッチで終える。例は次の通り（何れも秋永一枝（1974）より。)

（1） a. 「昔」
村というふることは「○○○」
（古今和歌集音片）

b.「あり」
うたたあるさまの
「○○○」
（古今和歌集頭片）

然し乍ら、金田一春彦（1964）や秋永一枝（1991）の指摘する處では、2拍動詞三類「居り」は「連体形」含め常に用語の低いピッチで終える。
（2）a. とこなかにをる
（上上上上上平）
[HHHHHHL]
（古今訓點抄）
b. おきにをれ
（平平〇上平）
[LL〇HL]
（古今和歌集類天片）

上の事実と，動詞語幹部分に音便が生じた変形や，
動詞屈折接尾辞である「助動詞ラム」，名詞化接辞-iを
取った場合の「アクセント」の振舞との比較から，2拍
動詞三類「居り」は下降式を持つ語であったと考える
べきであると主張する。

併せて，『類聚名義抄』等に見える3拍動詞第四類
「示す（「連體形」）及び3・4拍動詞第四類「控ふ（「連
體形」）」「結はふ（「連體形」）」等同様に下降式を持つ
語であったと主張する。

さらに進んで名詞にも下降式を想定するべき語の幾
つか存在する事を述べ，該方言には一般に認められ
る高起式・低起式の他に，下降式も認めるべきである
事を主張する。